

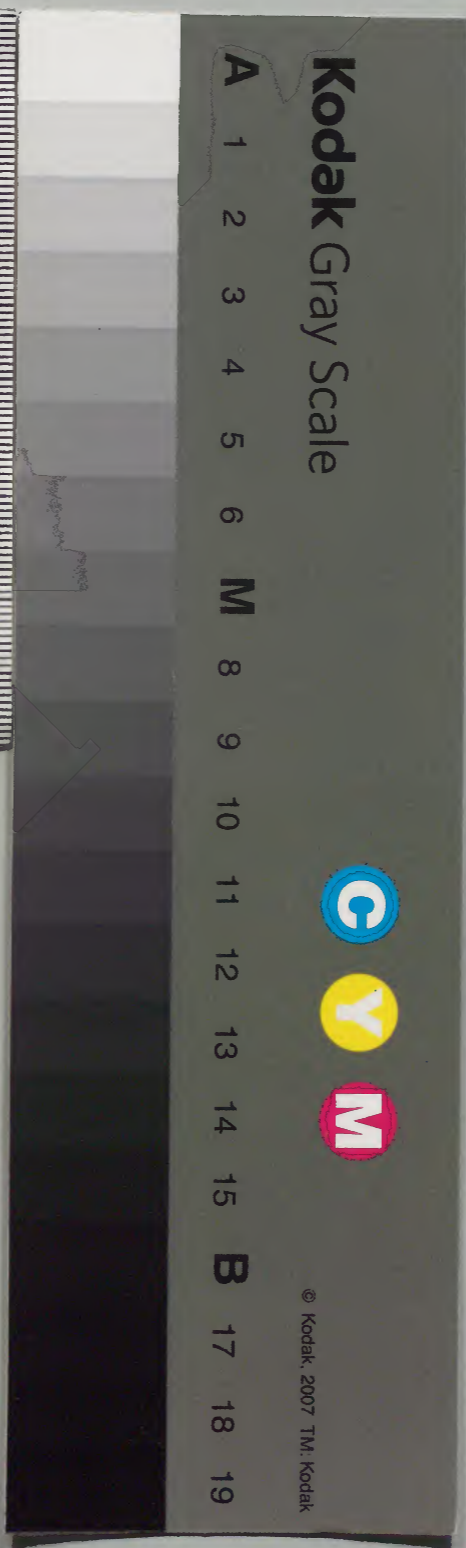
海紀聞

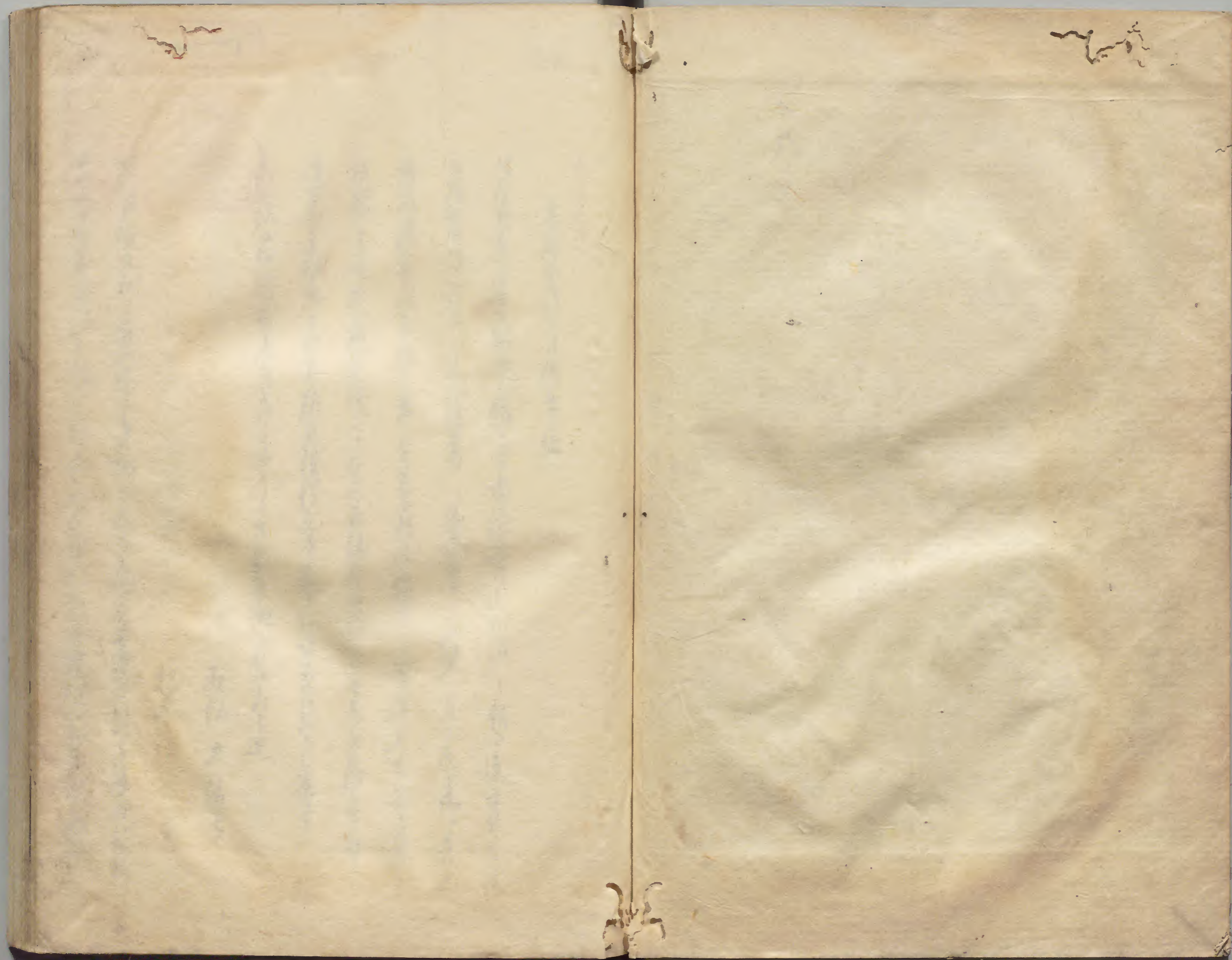
十九下

和一十二號

第 第 第
二 三
類 門 號

庫文閣内	
内閣文庫	
番號	和 14148
冊數	40 (21)
函號	271 140







奉
上
之
旨

長
崎
守
之
儀

此後右邊之通也國法之類中皆書翰之類上列供之類中逢年付書翰
也指之類也且 清法事 清代替 將軍宜下進之序吉出
御大控美以多端之事付為樣後難申候中逢也有由之類
社國之通達之難文候之由之類海東之類者中逢也其類名有之
治守之類明年之類之類及後候方中逢之類可也後之類
右邊之類御書之類有之方之類也其類名有之類

石
河
之
儀

松
平
河
内
之
儀

此後右邊之通也國法之類中皆書翰之類上列供之類中逢年付書翰
也指之類也且 清法事 清代替 將軍宜下進之序吉出
御大控美以多端之事付為樣後難申候中逢也有由之類
社國之通達之難文候之由之類海東之類者中逢也其類名有之
治守之類明年之類之類及後候方中逢之類可也後之類
右邊之類御書之類有之方之類也其類名有之類



エボウテイセテ子人

於此亦新レテアニ口港ニ於テ是レ人ニ北本政府出役人ノ在リ者ニ事也
町傳ニ於此所存ノ夜レ

曆救多八百五十年三月十日 和永六年正月廿八日

於此傳 フレガットバルス 祝号

有遠之志和洋乃中少也

世十二月

和 吉之来

本城山常之来

橋井栄七希

オロシキ 係辭於使前吉案濟奉以乃於春翰之大也

濟當水之依志後吉案國通以乃法務之ニ以西至利知亦外政能
已謀出否戦事を和好以事柄濟中如元角未也通商を和及以乃為之也
来言已否象形を和未也海事之初若以乃荒之也有計也乃以吉之也
吉之ハ福也海事の中と防也吉象形海事の中と必軍市也此計也
乃吉之平極也乃計也乃於吉之西國也乃平和を和と之り國所也
已休之好也形也其外也之押阻を和也中り自法也若等也其之新也亦り
也吉象形也其之吉象形也其之吉象形也其之吉象形也其之吉象形也
結也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也
信也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也
其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也其也

萬善長臨齋乃存經中書

魯西通手記

貴國經二百年、蹂躪通交外國之間、被教化之域、皆
經大變、兩面情勢即有異、且 貴國現在之情勢、有
險之處、是為可應解說者也、豈誠願欲者、即俾
貴國至盛勢、本國亦有益之也、三四十年以前、
貴國若永遠、踈避通外夷之意、猶可矣、蓋 貴國離
衆有大學文之國相極遠、住 貴國之海、常狂風大
作、 貴國之港口、有一尹不得入之、有一尹不得知
之、所以外國之人前時因不愛枉然費力費時、而非
曰有禁止來此之例、希見 貴國之疆界也、今者有
大異也、各學文既通達、各技藝既盛長、飄飄海通商
之事、遂已廣矣、火船已行、水程遂減多矣、所以現除

南北極因凌不可至之域外、天下無未得知之域未
得見之處矣、末時 貴國亦不得無理會、外國船至
貴國港口、年復一年來多、過近海邊之船尤多矣、此
皆非無緣無故而、有之、然不得已而當如此矣、蓋
貴國以東西南北之方、皆一開市通商之事、年復一
年既盛長、各國大小船比前時遂百倍多、縱橫渡海、
至不得不到 貴國順路之港口也、由此 貴國猶
可自揣摩、到底可否永遠避外國之交而拘待外人
之舊例耶、數年已前阿蘭陀國所遞之諫文、亦非指
是乎、今即有汎船者到 貴國來、日以為常、皆要勸
陳 貴國相和相交、允准本船臨時不礙到 貴國

港口以備其所需矣、自然賠 貴國所出之物、本船
遂理當其所帶之貨以為西面之利益、如此則不得
已而當出通商交易之事、各域所索者是也、本大臣
盼望 貴國既仔細詳究本國所題之事及此所述
之理、便不再延緩、即起通外國相於啓核理之文、亦
不再援引舊所謂不可犯之例矣、蓋所謂例者於理
義常有異也、譬如渡海遭難之人、各處不得不動人
之悲感、不得不見人之體恤、亦不得不濟于人、以歸
其本地、是為正理也、至 貴國非然矣、不之有
貴國六人北海遭風至本國北海島、收之養之、本大
君主施恩命本國船隨帶之解至 貴國港口、去年

遂解至_{一七}港口、該地方官不收之、加嚇噉使船
立即遠之、貴國遭難之人求准約見死于本地、船
主允之、放其便到海邊、或監或死、應待之處、豈有此
理耶、再者外國船一到、貴國港口、即據舊例、除不
准其人登岸外、用各域所為性、為各項傷心之術、自
約束壓欺人之苦、起以至驅逐船加禁止再來耳、又
豈有此理耶、知理之國、非如此矣、遭風之船、一到其
港口、立即設法、以整其傷、以救助其人、且厚待而禮
之、以為禮其國矣、是為正理也、外船來多者、每國以
為其本榮、相換土產各貨物者、每國以人民富貴之
首法、無時相通、以絕不相和之緣、各國駐公使、以為

交遊之據、是為各國相和睦安寧之正法也、由是觀
之、貴國之例、核正理有不符之處、可見矣、幸風聞
有一條例、貴國業已推辭之前時、或曰遭風不得
已而到、貴國海邊之外人、尊照無仁之舊例、遂入
監至死不放之、近年改之、准其回籍、如此則別條例
亦可改、即立新條、以符合當日物情矣、蓋貴國所
謂旧例者、不甚久見世也、且貴國既廢外國之交、
何以得之耶、得否見安寧在內、是所不知之也、惟杜
通外之術、以為杜險危自外來、法未必不悞矣、獨不
欲通外者、何足為理、以廢外人之討索耶、何預早未
得料度來日外人所討之事、復起興而且如兵器得

堅實必耶、既揣摩之、以何備不預耶、遠外世內勢遂
失其威矣、一視 貴國港口、所以為防阻者、有疑之
勢、便可見矣、外少數之海師一至、 貴國之海防砲
台皆立即陷、必矣、 貴國兵船、皆不足擋外國操熟
之數船、雖萬艘皆易可絕滅之、 貴國海島、亦皆可
至于不得相通矣、本大臣所誠願者、乃使 貴國再不
為拘泥外國而待外人、再不加疑惑傷心彈壓之、
如此則不到至似可嫌之勢也、本大臣隨應通知
 貴國、若無延緩而應允外人合理之討索、除後患外、
可至於盛勢、依其地域之廣大、依其戶口之數、依其
富貴及似其人民之善性、當至之地位、是也

御前大臣布怙廷

去年十月一聞知

貴國派欽差大臣、前往長崎、本大臣想其必有權、會
同議定兩國界互市通信三事、惟二位 貴大臣首相
會日即言曰、是未奉此大權、是以本大臣、繕條約之
大略遞 貴國老中、請寬閱決定、今據二位 貴大臣、
非一決言、曰 貴國款待魯西亞國、於別諸國有大
異、即請二位 貴大臣、堅定本月四日相會、所說之話
曰、大日本國將來若決定開港口准貿易、魯西亞
國即應首唱開市、各別國以前、大日本國將來若

Vreemde
Grootte
Schips



板本魯西亞船之圖

決定不論於何國互市、將通商之利益及諸項另外
 之方便、別國一得、魯西亞國日交界之故、自然同時
 亦應得矣、此外請無^推延、決定即開市以前、本國人於
 貴港備需物、應何如何處酬價、盼望二位貴大臣、即
 必速貴執政、無推延、定互市者、是為緊要、而相有大
 益之事也、目相會時、費心真待、厚有誠心、大禮、實所
 合知理之人、又一回理應酬謝、

御前大臣布恬廷

カウナヤナシ



右圖ハ濟陽の船ヲ示シテ其の
旗本ニ



右の圖の上ニ紙巾丈短尺ハニ少クハ



行列之圖

全



魯西臣人行列圖トアリシヲ
板本ヲ削リシトモエタリ
板本著者
杉原ノ此ノ級ニ据ケリ

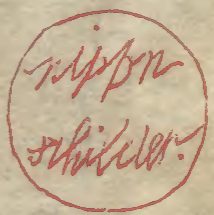


俄羅斯人行列之圖





右の圖ハ晋西人長海に上陸の因に其中国の事も詳見ありし事
ハ牙皇より外より但し國の事ヲ詳見あり



甲寅年正月廿四日

再聞北兵晋西兵より波羅泥^{ボロニア}を伐討の時和人の

事しりゆべし

ホーレン

長海に風吹

長海小島作六部と申す事

再慶魯兵其より及風説り後方中進

諸朝咸豊帝がエテス國王に其情^{明末}の賊徒退治に援兵を乞ひ

エテス人小島を軍船五十餘艘南進し北に向小島を渤海を越

如城^{アサヒ}に攻めしを乘り南浦海邊に據るに揚兵し人衆を焚捨人氏

列排お倉花中付大々火矢を傷に陳列を撃て攻入り城は

存次第に押寄り城一夜に而烈に火矢に燒れしに城は

百のボニベン、フランドリント、フゲル、ヒユルヘルリなど中火器は

燒之攻付りしにエテス人外海軍もも着す兵あり餘程攻め

初に城は折れしに其城を討てしに其城を討てしに其城を

討てしに其城を討てしに其城を討てしに其城を討てしに

於方外、指提領、古懐軍軍八人、事若遠愧、敬情上、度上、表成、は珍身
 預、由、生、他、如、于、係、概、軍、卒、牙、海、運、進、掛、軍、艦、を、提、升、御、の、平、修、體、内
 三、波、海、是、言、跡、を、遊、進、中、情、を、漸、く、取、寄、朝鮮、海、を、ま、く、海、海、以、り
 伊、小、正、當、未、中、跡、り、事、も、正、當、海、中、文、原、若、く、中、也
 一、香、海、館、中、唐、人、在、小、の、船、子、額、を、補、海、且、一、此、来、來、を、向、海、海、中、本、以、此
 事、り、中、也、日、秋、悲、嘆、之、餘、海、中、以、而、其、文、正、出、一、日、本、之、文、又、之、中、以、此
 拜、備、任、官、備、出、海、之、船、子、取、金、忠、之、自、執、領、之、お、後、且、一、同、經、命、之、及、後、之、
 俄、中、官、以、而、於、如、如、海、府、へ、何、と、申、出、中、知、事、之、言、其、中、也、申、上、は、海、海、人、を、
 肉、は、我、日、本、外、に、海、の、海、方、外、へ、入、事、後、を、海、海、林、に、海、中、也、申、上、と、過、詞、
 之、外、也、嘆、之、也、其、事、を、當、文、日、本、の、海、化、之、お、後、御、中、也、申、上、海、海、人、情、有、
 之、固、也、之、自、懐、事、也、其、事、は、い、し、ら、い、し、ら、い、し、ら、い、し、ら、い、し、ら、い、し、ら、い、し、ら、い、し、ら、い、し、ら、い、
 三月廿七日

右を讀み、何の處とも事、あつた、事、

貴官長海軍水師提督さまに呈す

先、不、後、未、希、を、申、上、あ、大、臣、の、の、附、言、を、種、く、之、と、以、事、是、る、を、爲、海
 を、令、を、以、之、自、爲、金、格、今、列、輪、と、長、崎、奉、り、申、上、之、使、を、以、之、
 亦、後、之、れ、を、日、本、政、府、の、あ、大、臣、は、道、を、事、を、以、之、
 結、事、未、然、と、自、爲、金、格、係、に、有、海、海、以、之、自、爲、金、格、係、に、有、海、海、以、之、
 周、旋、を、之、以、之、以、之、以、之、以、之、以、之、以、之、以、之、以、之、以、之、以、之、以、之、
 金、権、の、命、を、交、へ、申、上、す

カビティン ロイテナ下 砲 ムツシイト

十八百五十四年三月廿七日 三月廿八日 二がット 拍 ハル文 号 拍

大日本、の、考、支、薩、丹、花、あ、る、さ、ぬ、川、跡、を、爲、尉、中、也、申、上、あ、大、臣、の、後、

才一月廿八日 八月 亦、海、海、港、を、あ、る、不、臨、て、南、海、中、方、不、脱、す、時、再、日、本、中、也、

我が國に於ては、其の地を日本に譲渡せしむるに、
知事らと密に交渉し、其の地を日本に譲渡せしむるに、
其の地を日本に譲渡せしむるに、

其の地を日本に譲渡せしむるに、
其の地を日本に譲渡せしむるに、
其の地を日本に譲渡せしむるに、

其の地を日本に譲渡せしむるに、
其の地を日本に譲渡せしむるに、
其の地を日本に譲渡せしむるに、

其の地を日本に譲渡せしむるに、
其の地を日本に譲渡せしむるに、
其の地を日本に譲渡せしむるに、

日本政府は、其の地を日本に譲渡せしむるに、

其の地を日本に譲渡せしむるに、
其の地を日本に譲渡せしむるに、
其の地を日本に譲渡せしむるに、

其の地を日本に譲渡せしむるに、
其の地を日本に譲渡せしむるに、
其の地を日本に譲渡せしむるに、

其の地を日本に譲渡せしむるに、
其の地を日本に譲渡せしむるに、
其の地を日本に譲渡せしむるに、

其の地を日本に譲渡せしむるに、

及ぶ此時日本政府特小自己の利益を多し欲するの如し、亦其の
困難を記して、然る事は、小は、一々、帝皇の万に、其の約定を
為す、乃、方、難く、なる、の、時、勢、也、是、と、云、む、其、時、は、後、述、す、濟、遠、
女、子、を、東、洋、に、送、れ、ん、と、信、局、を、圖、り、以、て、之、を、存、す、所、を、其、所、を、
事、と、為、す、ハ、一、希、と、云、ふ、大、に、未、だ、極、め、て、其、致、の、矣、を、遠、く、の、故、を、更、け、ん、
と、す、

エロホウチヤナシ 新洋

カピテンシノロイヤ下破ホスシート

千八百五十一年四月十三日 三月廿八日 フレガット船 ハルラス 号

五米利水

各物献

○ 表之目録

小火輪格式連煤炭架連路全副

雷電信信機一副連銅線ハツガ子

銅保命小艇一隻

頭尾有氣管石能沉水

洞小艇一隻

能遇大浪不妨沉水双保命

極幼花絨紅十九尺長

玻璃張蓋首飾箱一個

西美利各各處林禽圖傳

姑蘇宗同生物園大共成九部

亞美利加獨約省土產圖信九十六卷

亞美利加獨約省大倉館史誌九卷

亞美利加獨約省律例

亞美利加海濱埠^埠以各處地理圖照原

便知各埠淺水^平埋岸

農政二卷內教耕田植樹養畜高法則原

亞美利加^{六元}官山史誌廿卷

建造光緒譜二卷

新光緒建在海邊夜眼望見能入埠

亞美利加官者依館原

做火輪機法則一。亞美利加獨約省書院之書名

洗火爐一個 連筒係燒煤炭或柴可也

千里鏡連架一^{ニホメカ}。亞美利加^{無美利加數省地理圖}官天秤量斗目碼各器^{圖元}

萬鎊 五管。玄丁鎗 三管。馬甲劍 十二個

炮手刀六把。小手鎗 二十管。過山鎗 一管

信袋二個連鎖金掛袋國旗寄信用。香燭香水胭脂等料。

亞美利加白酒一箱。紅酒一箱。三鞭酒一箱

金機香酒一箱。香水酒一箱。農文者器具校目別原

穀米仁一袋。シヤ草八毫^{シヤ草}

頂上香茶三箱。亞美利加獨約省大小會館目別

○ 姑之物 獻皇后

描金玻璃粧飾表一個。香燼香水胭脂牙粉等料
繡花閃緞一疋。

○ 目錄外

○ 姑物呈 阿訖任勢子殿

里里為園戲場圖傳。姑園畫如戲場之類。
六響牛餘六管。列葉火柴一袋。亞墨利加白酒一小桶。
二款圖一袋。香燼香水等物十二件。大時辰鐘一個。
大馬鎗一袋。洪火燄一個。洗石炭及紫。
頂上卷紅絨文。馬甲劍一口。保命網少挺一隻。連漿。

○ 姑物呈 教地後前子殿

亞墨利加白酒每戲場此亦傳二本

燭約省博物院名揚名夫之衣服圖。客樓間畫一固。
時辰鐘一固。六響牛鎗一管。香燼香水等物十二件。
馬甲劍一口。大馬鎗一管。亞墨利加白酒一少桶。

○ 姑物呈 招平初夜子殿

學子建官廳法則圖一本。香燼香水等物十二件。
華盛頓京圈一幅。別有街道一幅。亞墨利加白酒一少桶。
時辰鐘一個。馬甲劍一口。馬鎗一管。六響牛鎗一管。

○ 姑物呈 招平任夜子殿

燭約省史記。大馬鎗一管。香燼香水十二件。
時辰鐘一個。大馬鎗一管。六響牛鎗一管。

馬甲劍一口。亞墨利加白酒小桶

。此物呈久世天初寺殿

建造御園新屋法界。金山大埠畫景一幅

六響斗鎗一管。多鎗一管。馬甲劍一口。時辰鐘一個

亞墨利加白酒一小桶。香燼香水等物九件

。此物呈內藤純任寺殿

美呢蕪古省王產景傳二本。荷和敷村画圖一幅

時辰鐘一個。六響斗鎗一管。馬甲劍一口

身漆一管。香燼香水等物九件。亞墨利加白酒一小桶

。此物呈林大學寺殿

亞墨利加省王產景類景傳九五卷。吹丸器茶具一副

頂上卷紅絨一丈。頂上香茶三袋。大時辰鐘一箱

馬甲劍一枝。大鳥鎗一枝。香燼香水等物九件

亞墨利加白酒一小桶。三鞭酒一袋。火爐一個能燒石炭及

六響斗鎗六管別若火柴一袋

。此物呈丹戶對馬寺殿

學工藝各政此書內能知音識之法

阿連大埠畫景一幅。香燼香水等物九件

亞墨利加白酒一小桶。櫻桃香面一小桶。馬甲劍一口

六響斗鎗一管。時辰鐘一個。鳥鎗一管

。此物呈伊澤美他寺殿

大火輪船畫景一幅。保命山松栢式一袋

亞墨利加各酒一小桶。櫻桃香酒一小桶。弓甲劍一口。
六鄉斗^手檢一管。時辰鐘一個。多檢一管。
香齋香水九件。

○此物呈禮殿民部少輔殿
名^係畫一版。此^係亞非利加所出

亞墨利加各信館住名。香齋香水九件。時辰鐘一個。
身鏡一管。亞墨利加各酒一小桶。櫻桃香酒一小桶。
馬甲劍一口。六鄉斗^手檢一管。

○勢物呈松濱滿太郎殿
上柳紙一版。時辰鐘一個。櫻桃香酒一小桶。弓甲劍一口。
亞墨利加各酒一小桶。香齋香水九件。六鄉斗^手檢一管。以上

亞墨利加各街表投抄目錄

此品書前卷、要細俗文、三卷、

大統領

視匣一副。紙匣一副。書棚一架。書案一張。花銅斗香爐^{車付}一座。
存子篋一具。插卷筒^{車付}一箇。暖爐^{ホヤ}二箇。紅光絹^{ハククエ}十匹。
素光絹十匹。花^{エニヤメ}縹紗五匹。紅^{イタジメチリヤメ}縹紗。

使節

視匣一副。紙匣一副。紅光絹^{ハククエ}三匹。素光絹二匹。花縹紗二匹。
紅縹紗三匹。

アークムス

紅素光絹三匹。紅縹紗二匹。鬆梳二十副。整
ホットメン

紅素光絹二匹。紅縹縹紗二匹。懸梳字副

整

ウ丹ルリアムス、

同三種

子(ルリ)

月三種

萬氣車テレグラウ其外落工匠五人、

紅縹縹紗一匹。懸梳十副

乘船五人板

米三百苞 雜穀馬三百隻

整

亞墨云理加、遺物目錄

阿波伊智子殿
柳條峽絹十五匹

坂野伊智子殿
月十匹

松平伊智子殿
月全

榊伊智子殿

又世

内友

整

亞墨云理加

林大學頭ヨリ

五彩箋一箱。濃州紙全。彩畫折向紙全。各種文具百件包裏

。冊糊藻香米螺一箱。螺盒螺盒七箱。紙匣一副。三套酒盆二套。携盒二套

升戸對馬ヨリ

整

鐺板二枚。二箱。雨傘二十柄。二箱。校箒三十本。二箱

整

任澤義能ヨリ

素綾一段。紅綾全。織竹各器各器一箱。竹造佩籠各器。竹几二脚二脚

人勝十三個八個。整

杉殿長部ヨリ

杆條縹紗一段。瓷盆廿個二套。碧仲十陶二套



整

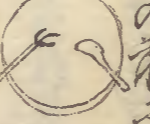

松勝防太舟

淡藍三糸 花紋席三糸 櫛炭三糸

馬場物語再傳

嘉永六年六月廿七日午時刻針長崎遠陣と異船の帆影は五股
 港と向ひ流末は船子來り附長崎島家と遠く黄末の所は船
 長崎北遠見と云ふ物言花衣一と云ふ舟の揚物一と云ふ揚島家
 一と云ふ揚物一と云ふ揚島と云ふの揚島揚島可なり以奉り持の揚
 物一と云ふ揚物の如く右の方野母ノモ名産カラス、小舟の揚物揚物の揚物
 揚物と云ふ方座母名在り其不長敷五十里遠百十里遠と云ふ
 遠を先野母座母と云ふ揚立山後所遠と云ふ二里餘を隔川
 依り船母と云ふ所の揚物を津途山嶺の揚物と云ふ揚物と云ふ
 揚物と云ふ所の揚物中ちま此揚物と云ふ揚物と云ふ揚物と云ふ揚物
 揚物と云ふ所の揚物と云ふ揚物と云ふ揚物と云ふ揚物と云ふ揚物
 揚物と云ふ所の揚物と云ふ揚物と云ふ揚物と云ふ揚物と云ふ揚物

三角不形り又又よふ五折りみそ  三角のこまのりあ邦あふ糊
を以て附あ封すすま布とたふあてよふ白蠟を添けけを楯の上り
官不の不章を押しう又を赤邦山石溜境にこしつせうの成り入れり
成りたれ其の治冷天碧紙出書とまこモウレに右又を右偏具成り
清涼親の紙いすり大海を添るすやに成るを御治るまこよふ
飯炊の沙流はすうすまゆり候後清涼と述又を今い藤末あつた紙と
進んへして先席の赤伴ホ「タアア」  大あつた このホクキの とあけしり者は後を裁け
若園割の血或は大津小是を添るまを「カレツ」と云牛肉を焼く者さる
あてを「カルモノ」進と云紙の焼肉と「ホルトガレ」の焼くて標 アガ るゆあり
ニを「テカ」ラヒ と云牛肉の焼肉之口と「コッ」コッ と云是れ赤邦のけんらん松の調子
もて後 カキニク の葉肉を焼とい若くはゆりけのゆりた大平 ヒラ やうの袋ふ盛

たり湯をマダラウエインと云蒲萄酒之而して人の前ホコッコッと茶割の味也
あ方より七子 サデ 教達と徳多 サダ 紙の地をけ   カナキンの版
糸を回したみそを添て若き通奇友とこの本抄は各勝不掛かふ
藤末の地を黒く若技をけがん事を思ふ成る藤末の口言不適 カキ ひら
海山小食のわへへ衣飽わり七子と徳多 サダ 紙の地 カキ を回書をまぶして「タ
ア」ア と云ふまゆへへ又を調子とて清涼にすまこよふと云紙片定りて使す
核移柄のわくもて先口らもの出用後高大大さるる入信て赤の強 ヒラ
一紙進し知は中例のわく若き進一進早の又二言と限て今各形中進は
先正若常のわくもて出後のがつ紙進しは又一進早のわくは紙を
紙剛を後へへとて右二紙の終身は核移柄を動む紙剛の式を
取らるるば頂へへと云方かきを思て是人の花前より赤を思て是人の

を掛りたるをその肉面皆妙なりこゝゆきを聞か彼者云火太夫
内外正磨きし所の燈光外へ透りてこゝ燈の石の海をいれ其燈臺のま
却る響く内面を妙麗の光りたる因内は静かきと見えのよふてあめ
刺すに云。戲影の情あれりと梅肉を隨て船屋のゆふ今夕の鳥橋に夫人
とて居り入勝舟橋子みたりは静かきと見え大船時の方
たりもち明かみなりも暗く再びと後一歩出ぬあめりては因内はあめり
障子の影ありは静かきと見えのよふ今夕の鳥橋に夫人
内は燈と懸ては静かきと見えのよふ今夕の鳥橋に夫人
未見は彼云さういふ妙をいへと云ては静かきと見えのよふ今夕の鳥
の内一且其の勝ありあめりてあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥
カ多くと云りて二同計の大船時はあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥

あし不活るがやたふ静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥
押裁と振波のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥
これば静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥
ナニフシナかり一と静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥
花のまき静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥
静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥
或は花のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥
あまのこゝ物結局あめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥
野ね百歩のまき静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥
此て片隻のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥
静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥のあめりては静かきと見えのよふ今夕の鳥

異松より不松の如き舵^{カテ}を造りて形を造りて進^{チカ}りて
彼コキリカワの舟も形の自性を多しとあり

馬師の言はれは舟十の巻も舵やうらふ舵やうらふか一圓引くと云はれ
而りれはうらふ舵やうらふ

綱飾^{ツナカ}の類 子師の言はる綱飾也

一日意持船にて今日いふ舟の綱飾を二見くわくといふ舟に二見くわく綱飾を
いふ又小綱飾を大綱飾と見し進先は三人剣筒を拵て松の意
古来より二見不別なるに連綿と立て肩と肩と連綿とあり一人鼓を
お一人剣を拵て指揮せし指揮も海ひれを連綿と見し上下
形はるもの人一人舟の如きと云ふ又小舟の綱飾は舟の事あり板
を指揮し二見の軍令は剣を以てし舟中舵は舟の指揮も海ひれを
とを舟を以て指揮し舟の事と云ふ又舟の綱飾は舟の事と云ふ
右鼓は舟の綱飾ありや彼舟白綱飾は舟の綱飾は舟の綱飾あり
掛りの態度は舟の綱飾ありやと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
舟の綱飾は舟の綱飾ありやと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

よつて相子とく整下と云又劍筒の劍除は後囊^{フクロ}か入て後中押むあか
の劍ハ穎^{スルト}尖銳利刃^トなり囊^{フクロ}中^{ナカ}に^ニ秘藏^{ヒツカ}を^ヲ脱走^トよつて木の鞘^{ツツミ}に納め
後々佩^ヒよとま^ニ劍筒の^ニ關係^ヲ終て三百人の内五十人下^ニ降^ルも^ハ次^ニ五十人
槍^ヲを携^ヘてより^ハあり^ニ百^ニ人^ノ内^ニ並^ニ列^シ人^ノ數^ヲふ^ニて^ハ文^ヲ入^ルる^ニ通^シ
あ^リて^ハ後^ノ凡^ノの^ハか^らに^テ槍^ヲと^シ劍^ヲ筒^ヲと^シお^互へ^テ先^ノの^ハか^く教^ノ劍^ノの^持得^ル
後^ニ以^テて^ハ淋^ヲを^ニ關係^ヲは^つて^ハり^て槍^師五十人^ヲ降^ルも^ハ後^ニお^互へ^テ
五十人^ノ劍^ヲを^携へ^てより^ハあり^ニ又^ハ百^ニ人^ノ砲^師の^百餘^ノ隊^ヲを^執は^ば分^ケ入^リ
お^互へ^テ關係^ヲ巡^リより^ハり^ニ言^ハ入^ルる^ハ降^ルも^ハ後^ニお^互へ^テ既^ニ中^ノ隊^ノ上^ニ
て^ハヤ^アゲ^ルの^ニ關係^ヲあり^ニヤ^アケ^ルを^ハり^て後^ニお^互へ^テ先^ノの^ハか^く橋^ノ
の^持得^ルも^ハり^ニて^ハり^て後^ニお^互へ^テ先^ノの^ハか^く橋^ノの^持得^ルも^ハり^ニ
僅^ニ人^ノ出^テ後^ニお^互へ^テ先^ノの^ハか^く橋^ノの^持得^ルも^ハり^ニて^ハり^て後^ニお^互へ^テ先^ノの^ハか^く橋^ノの^持得^ルも^ハり^ニ

八首^ノ目^ノ出^テる^ハ松^ノの^在原^者は^五丈^ヲ掛^テ於^テ五十^丈ノ^首元^ヲを^破門^ノ
後^ニお^互へ^テ先^ノの^ハか^く橋^ノの^持得^ルも^ハり^ニて^ハり^て後^ニお^互へ^テ先^ノの^ハか^く橋^ノの^持得^ルも^ハり^ニ
先^ニ人^ノ外^ニハ^ハ圓^ノ丸^ヲお^互へ^テ先^ノの^ハか^く橋^ノの^持得^ルも^ハり^ニて^ハり^て後^ニお^互へ^テ先^ノの^ハか^く橋^ノの^持得^ルも^ハり^ニ
上^ニ下^ニた^ラ右^ニ左^ニ振^向を^あら^はせ^お互^へて^ハり^て後^ニお^互へ^テ先^ノの^ハか^く橋^ノの^持得^ルも^ハり^ニ
左^ノの^ハか^く橋^ノの^持得^ルも^ハり^ニて^ハり^て後^ニお^互へ^テ先^ノの^ハか^く橋^ノの^持得^ルも^ハり^ニ
上^ニ下^ニた^ラ右^ニ左^ニ振^向を^あら^はせ^お互^へて^ハり^て後^ニお^互へ^テ先^ノの^ハか^く橋^ノの^持得^ルも^ハり^ニ
右^ノの^ハか^く橋^ノの^持得^ルも^ハり^ニて^ハり^て後^ニお^互へ^テ先^ノの^ハか^く橋^ノの^持得^ルも^ハり^ニ
馬^ノ内^ニ云^フ隊^ノの^數は^をあ^らは^せて^ハり^て後^ニお^互へ^テ先^ノの^ハか^く橋^ノの^持得^ルも^ハり^ニ
ゆ^にて^ハり^て後^ニお^互へ^テ先^ノの^ハか^く橋^ノの^持得^ルも^ハり^ニ
さ^らに^ハり^て後^ニお^互へ^テ先^ノの^ハか^く橋^ノの^持得^ルも^ハり^ニ

チヤー子ニ系船は次ハッテイラ内外白ノホ一止外去人キ人系船外
は彼内外赤系 系船して長を引ハッテ 昔小外去人少人 後文 系船
使船船の左方小ニ艘ニ廻リつきて右方上船に所小ニ艘の如き物
にて表送不彼本細式を之と丁掌れふとて別ニ格殺小及ハハリと
是ノ如儀而也 玉田家の目録を以テ 系船に 別細記列船所

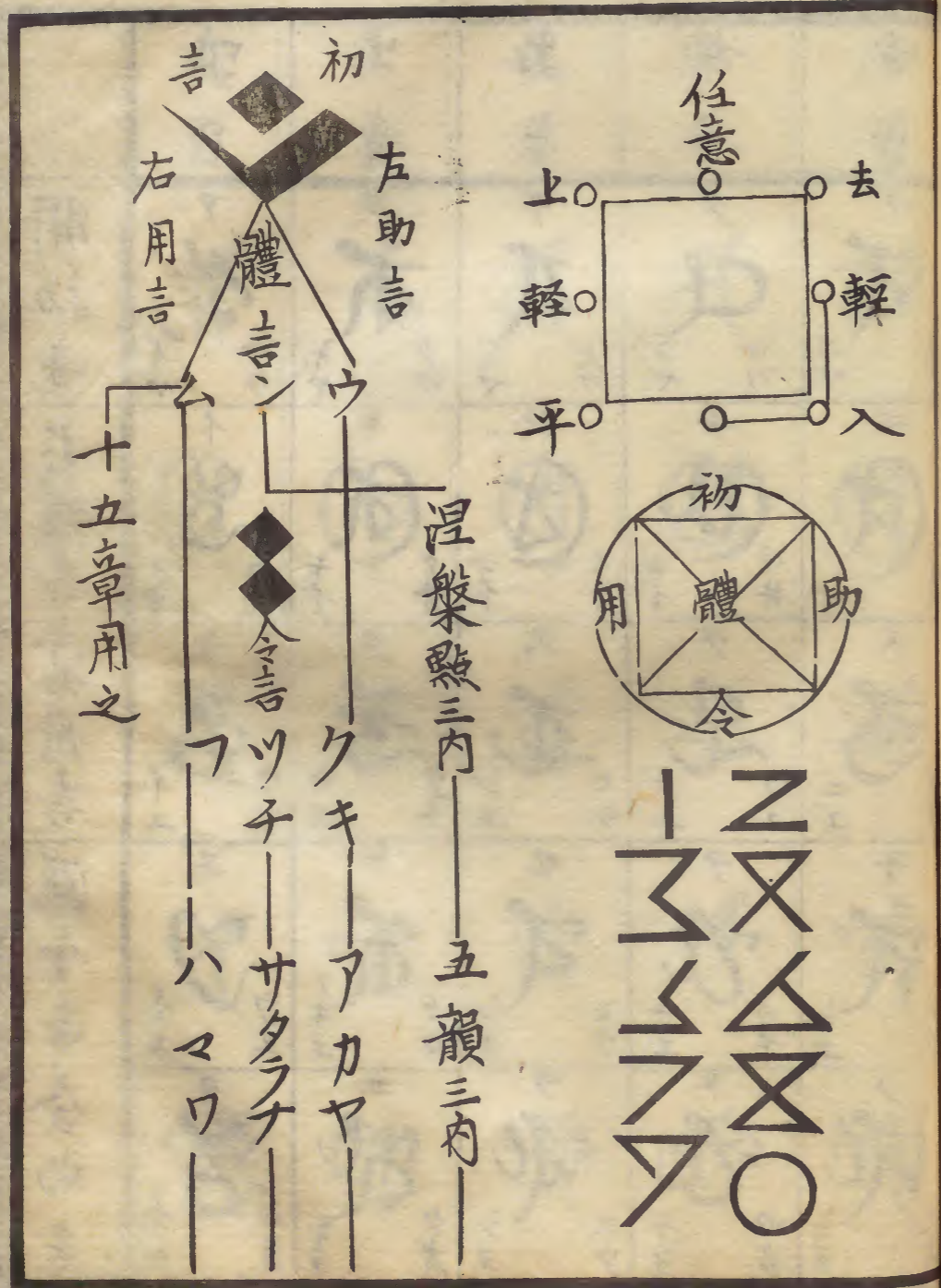
系船十人 オロヤ格 玉田家十人 口シヤ系人 口シヤ人下五格十人
長船所使十人 同十人 口シヤ人 口シヤ人

使船 通船一 友人 口シヤ下五 玉田家五及馬 口シヤ一 口シヤ一
通船十人 系船を若使船の如儀の左方小ニ艘及不ヲ口シヤ格入
と云抄自ノ門外舟押運ハ小トホト門内ハ僅十人入ノ内十人
玉田家入此の如止ハハ人玉田家何人及使船十人 別格十人 口シヤ

友人一人 系船十人 船頭一人 若格者友人 大船一艘を船所人 舟由名
赤系ノ重儀ハ船頭一ホ一止ハ上席の赤系云云 若格者ハ使船十人 冠上ノ
多の毛白ノ外ノ友人ハ皆思ハ使船十人を肩小及リハホ一止金銀太
格者ハ船後系船一系船多ク船頭一較少ナリ又船頭多クハ船頭一人
席ハ十二系及入別席一列 列係 系船十人 若格者ハ船頭一較少ナリ又船頭多クハ船頭一人
船頭ハ船後系船一系船多ク船頭一較少ナリ又船頭多クハ船頭一人
付船事没ナリ若格者ハ友人一人 系船十人 若格者ハ船頭一較少ナリ又船頭多クハ船頭一人
入の時船頭一人 若格者ハ友人一人 系船十人 若格者ハ船頭一較少ナリ又船頭多クハ船頭一人
息の如ク若格者の席ハ船頭一人 若格者ハ船頭一較少ナリ又船頭多クハ船頭一人
對言ハ使船十人の如ク若格者ハ友人一人 系船十人 若格者ハ船頭一較少ナリ又船頭多クハ船頭一人
例の如ク若格者ハ友人一人 系船十人 若格者ハ船頭一較少ナリ又船頭多クハ船頭一人

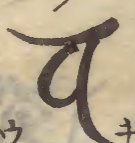
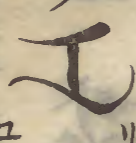
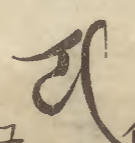
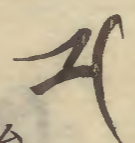
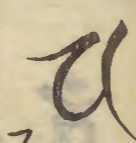
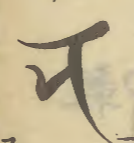
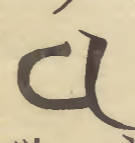
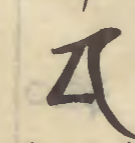
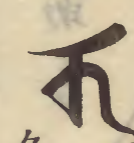
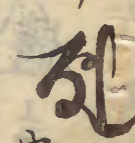
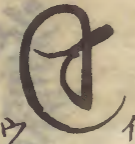
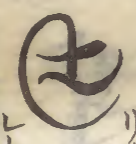
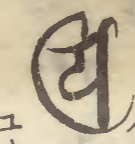
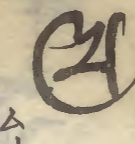
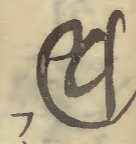
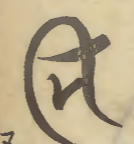
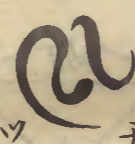
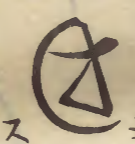
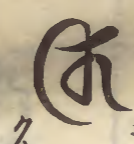
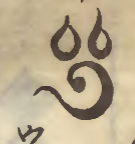
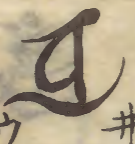
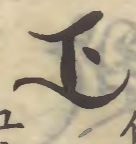
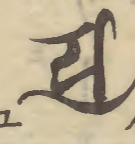
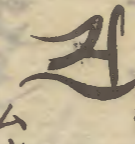
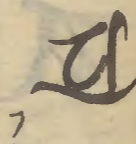
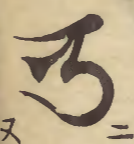
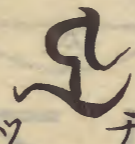
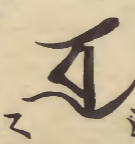
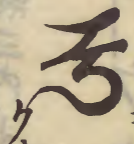
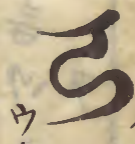
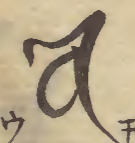
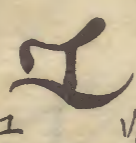
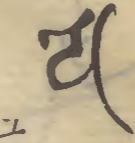
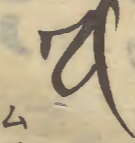
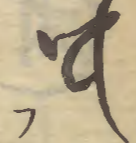
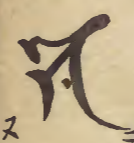
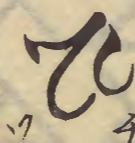
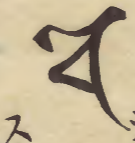
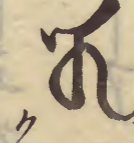
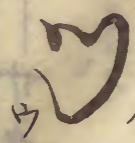
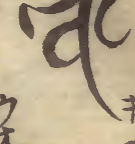
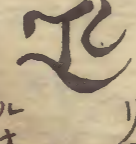
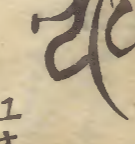
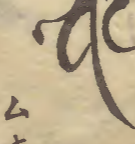
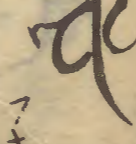
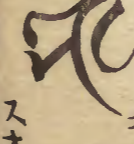
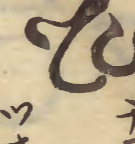
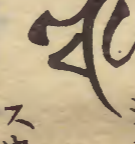
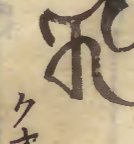
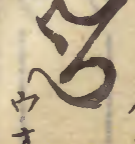
進む嘆みし緒紳不和を生く「カトトキ宗」を信する後多く小米里里
此従するもの百十五年「コシチキエツト」見よ及以「ロテスイ島」少於て嘆人
多く民を移す千六百零九年小島又然り「角」於「ワイルム」ベニ
人名「クハケル」ヨハニホキ区の高る教育白名小島を信する徒を所り
「ハケル」と云を後以又を信此徒を信するもの「カカロリ」を多き廿八
年「ヒルキ」ハハキ廿二年「ルモ」トを多き廿二年小島係り前
徒民を稀疎しと蕃殖しと山林沼澤容易不利あり居られ
此徒民亦世土著としめん為可其魁初作自地ありめ其政を寛
裕し是は不國と強半の自然と一程の政務をあり亦嘆西の教
小送る君ハ役逐し山林を起し山林却て遷り其徒の境也故系
嘆佛指遠相察各國人此地小住し君見才の勢をありぬ耕後概
イニスマラエドイッ フラニソ

を勢め厚福の民とあり就申嘆人諸君追ホマしと創法徒と業とし且
必要法件一も漏遺せし千七百五十年嘆小を禍りて其徒民を傷
嘆小商税の二助とありふ小島其形ホマ其形其策を起さし
其法と法員あるんふ七百五十七年の硝子紙画料拾其茶の税課其小人
拒て嘆國不遺イ道バ嘆國止其策を以て前之二件を回復せんと云又其國を七百
五十二年の茶税を遺イ道ら以「リスト」少於て其後を以て嘆人亦不及し
麻州、一其の茶税を以て其を以て其を以て嘆人「リスト」を圍カ
ふ七百五十年其相國人「ヒラテル」也止北名小島にて嘆小と徒交するものと
約以此の嘆人多く挑戦せんと其の若く其九十三の徒民を食し
ふ七百五十六年七月十日今より不韜物ある事を知りて其相國人
人貴を統侍を以てり明年「ロリ」也止北名れ其有て嘆人大駭小



異國字種別覽

父字監ヤイユエヨ母字イキシチニヒミ井リイ

喉音	舌音	唯音	唇音	唇音	舌音	舌音	齒音	牙音	喉音	
ツ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	ケ	サ	カ	ア	開初言
										
ウツ	井ヤ	ユウ	ムツ	フツ	ヌツ	ツツ	スツ	クツ	ウツ	
イ	リ	井	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	尖體言
										
ウ井	イ井	ル井	ム井	フ井	ヌ井	ツ井	ス井	ク井	ウ井	
ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	寔用言
										
ウ	ユ	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	
エ	レ	エ	メ	ヘ	子	テ	セ	ケ	エ	匾令言
										
ウエ	井エ	ユエ	ムエ	フエ	ヌエ	ツエ	スエ	クエ	ウエ	
オ	ロ	ヨ	モ	ホ	子	ト	フ	コ	ヲ	合助言
										
ウオ	井オ	ルオ	ムオ	フオ	ヌオ	ツオ	スオ	クオ	ウオ	

	喉音	牙音	齒音	舌音	舌音
初言	フ	カ	サ	タ	ナ
體言	イ	キ	シ	チ	ニ
用言	ウ	ク	ス	ツ	ヌ
令言	エ	ケ	セ	テ	ネ
助言	オ	コ	ソ	ト	ノ
	el	ka	sa	ta	na
	i	ki	shi	chi	ni
	u	ku	su	tsu	nu
	e	ke	se	te	ne
	o	ko	so	to	no

唇音	唇音	唯音	舌音	唯音	横 豎 母 父 字 字
ハ	マ	ヤ	ラ	ワ	
カ	ク	キ	ク	カ	横 産 字 音 引
ク	ク	ク	ク	ク	
シ	シ	シ	シ	シ	
ツ	ツ	ツ	ツ	ツ	
ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	
フ	フ	フ	フ	フ	
ホ	ホ	ホ	ホ	ホ	

ト段々ニ分ラ出シタリ
 二十五字此是リ
 轉シ出タルナルベント此方ニテユ夫シタル人アリ
 乃テ余門ニ游ブ人ナリ別ニ其圖アリ面白説



一 乙
 三 又
 厶 厶
 フ 又
 厶 〇

○ ● 部字濁
 輕 重

ハ	ハ	カ	サ	タ
hd	hd	gd	gd	dd
hi	hi	gi	gi	di
hu	hu	gu	gu	du
he	he	ge	ge	de
hc	hc	gc	gc	dc

一	喉音	牙音	齒音	舌音	舌音
初言	ア	カ	サ	タ	ナ
	AV	KV	ZV	YV	EV
體言	イ	キ	シ	チ	ニ
	AVJ	KYJ	ZYJ	YYJ	EYJ
月言	ウ	ク	ス	ツ	ヌ
	AU	KU	ZU	YU	EU
令言	エ	ケ	セ	テ	子
	AS	KS	ZS	YS	ES
助言	ヲ	コ	ソ	ト	ノ
	AO	KO	ZO	YO	EO

唇音	唇音	喉音	舌音	喉音	横
ハ	マ	ヤ	ラ	ワ	母父
AV	BV	EV	DV	OV	字字
ヒ	ミ	ヤ	リ	イ	
AVJ	BYJ	EYJ	DYJ	OYJ	
フ	ム	ユ	ル	ウ	横
AU	BU	EU	DU	OU	産字音列
ヘ	メ	エ	レ	エ	
AS	BS	ES	DS	OS	
ホ	コ	ソ	ト	ノ	
AO	BO	EO	DO	OO	

一 I 三	二 II 四
III 五	IV 六
V 七	VI 八
VII 九	VIII 十
IX	X
XI	XII

羅旬語ニテ記シタル印本ハ皆此體ナリ
 總テ記號ニ用ユ船土之自鳴鐘ナドニ記セル文是也

ニ
 2
 4
 6
 8
 0

一
 I
 3
 5
 7
 9

數量之文字ニ體アリ總テ
 セーベルレツテルト云セーベルハ算計之ナリ
 零點アリ合セメナナリ其體右之如シ

舌	舌	齒	牙	喉	和カタカナ字
言	言	言	言	言	初
ナ	タ	サ	カ	ア	言
フ	シ	チ	カ	カ	體
ニ	今	シ	キ	イ	言
ニ	十	シ	キ	イ	用
又	ツ	ス	ク	ウ	言
又	フ	ス	ク	ウ	令
子	テ	セ	ケ	エ	言
子	テ	セ	ケ	エ	助
ノ	ト	ソ	コ	ヲ	言
ノ	ト	ソ	コ	ヲ	言



夫世界ハ圓角ニ習物之器現レテ文字ヲ寫ス
 山海之界ハ知ラ子ト山陸之境在リテ世上分ツト雖モ
 日月星ハ萬國モ變ラス亦人之體音モ不變エタ
 異國之文字ハ變レドモ五音ハ和漢同體ナルヲ
 今茲ニ著ス者ハ

耕雲齋宗英撰

一 二
 三 四
 五 六
 七 八
 九 十
 ● ○
 重 輕

Handwritten scribble at the top of the left page.

Handwritten scribble at the top of the right page.

	嘆	舌	嘆	唇	唇
	言	言	言	言	言
	ワ	ラ	ワ	マ	ハ
	ワ	ラ	ワ	マ	ハ
	イ	リ	井	ミ	ヒ
	イ	リ	井	ミ	ヒ
	ウ	ル	ユ	ム	フ
	ウ	ル	ユ	ム	フ
	エ	レ	テ	メ	ヘ
	エ	レ	テ	メ	ヘ
	オ	ロ	ヨ	モ	ホ
	オ	ロ	ヨ	モ	ホ

Handwritten scribble at the bottom of the left page.

Handwritten scribble at the bottom of the right page.

